

## 坪田譲治 草稿「魔法」

### 解題と翻刻

山根知子

#### 一 解題

草稿「魔法」は、作者坪田譲治の没後、自宅にて発見されたものであり、昭和六十二年に、三男坪田理基男氏より吉備路文学館に寄贈され、所蔵されている草稿である。

なお、本草稿は四〇〇字詰め原稿用紙で十五枚に及ぶ草稿であり、これまでそのうちの一枚目〈第1葉〉だけが記念品として複製され配布されたことがあり、本学附属図書館の「坪田譲治コレクション」にもその複製草稿一枚が所蔵されている。

本草稿は、坪田譲治が雑誌『赤い鳥』に寄稿した原稿に、主宰者である鈴木三重吉が朱を入れた手入れ稿であり、そうして直された形が『赤い鳥』に掲載されている。なお、草稿手入れ後、校正の段階でも若干の修整がなされている。

三重吉が譲治の原稿に手入れをして返却した事実については、譲治によって次のように記されている。

先生は雑誌が出た後、その原稿を私にさげ渡され、  
「ぼくが直したところを、よく見て勉強し給え。」と、何度も申されました。

（坪田譲治「三重吉先生」『日本文学全集』「月報」  
集英社 一九七五年六月）

本草稿「魔法」も、これらのさげ渡された原稿の中の一つである。この草稿「魔法」について、その手入れ内容の詳細はこれまで公表されておらず、童話「魔法」の成立論において、重要な資料となろう。

ここで注目したいのは、譲治の童話「魔法」が小説「けしの花」と内容の重なる部分を有しているという点である。この他にも内容の類似した童話と小説が数組存在することについて、従来の研究では、例えば西田良子氏は、「同じ題材を用いた童話と小説」を「類似作品」として列挙し、その脱稿順について「ここに挙げた小説が皆『赤い鳥』に発表された童話を補筆・改作して小説にしたものばかりだ」として、童話が先で小説がそのあととする捉え方をしている（坪田譲治―坪田文学における「小説」と「童話」―『講座日本文学第六巻 日本

の児童文学作家 1』一九七三年九月 明治書院 一七七頁。

しかし、この問題に関しては、これまでの草稿研究によって判明した例として、類似する童話「でんく虫」と小説「カタツムリ」との関係において行なった草稿「でんく虫」の調査においては、譲治が三重吉に提出した小説「カタツムリ」とほぼ同じ内容の作品が三重吉によって手入れされ、童話「でんく虫」となったことが明らかとなっている（坪田譲治 草稿「でんく虫」「妹とカタツムリ」―解題と翻刻―『ノートルダム清心女子大学紀要』二〇〇五年三月、坪田譲治 小説「カタツムリ」から童話「でんく虫」へ―童話の誕生と鈴木三重吉『大学院開設十周年記念論文集』ノートルダム清心女子大学 二〇〇五年十一月）。

このような成立に関しては、まずは、本草稿「魔法」と童話「魔法」発表形、および小説「けしの花」発表形、それぞれの状況について確認できる面がある。その要点を以下整理してみたい。

#### ■ 草稿「魔法」

《原稿用紙》 四〇〇字詰めA4版原稿用紙（茶野・左下欄外に「池袋三一堂製」〈縦書き〉と「10×20」〈横書き〉の記入が入った原稿用紙） 十五枚

《筆記用具》 草稿の第一形態は、譲治の筆跡のブルーブラックインク。これに対する三重吉の筆跡による手入れは、削除線が赤インクおよびブラックインクで、訂正書き入れがブラックインク。

#### ■ 「けしの花」初出

昭和九年十二月 『経済往来』

#### ■ 「魔法」初出

昭和十年一月 『赤い鳥』

これらの発表の経緯を考察するにあたって、さらに坪田譲治自筆「ノート」（吉備路文学館蔵）の一冊として存在する、作品発表および稿料等が記録されたノートの内容が参考になる。その記録のなかで「魔法」と「けしの花」の記述が見られる箇所には次のようにある。

十月 （中略）

魔法 （童話 15 赤い鳥一月）

（中略）

けしの花 （小説 70 経済往来 十二月号） 60

ここで、「ノート」より判断すると、（ ）内の「15」および「70」という数字は、それぞれの四〇〇字詰め原稿枚数を示し、下方に記された「15」および「60」という数字はそれぞれの寄稿先より受け取った原稿料（単位Ⅱ円）を示していることがわかる。

ここですらに注目すべきことは、この二作品が昭和九年の「十月」という同じ項目中に挙げられていることである。これは、譲治の「ノート」の構成が、作品発行の記録を目的とするだけでなく、月々の収入となる稿料計算をするための家計簿の役目を果たすよう構成されていることから、同じ「十月」に記載されていることは、両作品とも十月に稿料を受け取ったことを意味する。同時に、譲治の生活の苦しさを

知っていた三重吉は、当時稿料を寄稿後すぐに送るように考慮をしていたことが三重吉書簡(『鈴木三重吉全集』岩波書店)より明らかである。とすれば、「魔法」は十月に三重吉の手元に届けられていることがわかる。一方、「けしの花」も『経済往来』十二月号発表の原稿であることを考えれば、それとほぼ同じ十月までには、譲治は編集者に原稿を届け稿料を受け取ったのではないかと考えられる。また、この「ノート」の記述より、譲治の創作意識のなかで「魔法」は童話であり、「けしの花」は小説であるというジャンル認識がはっきりしていることも窺える。

なおここで、譲治「ノート」より、『赤い鳥』に送った作品で原稿枚数が明記されているものを挙げると、以下のものである。

「河童」(掲載時の題名表記は「河童の話」) 十枚、「善太と汽車」十四枚、「正太と蜂」十三枚、「ロバと三平」十一枚、「樹下の宝」十五枚、「村の子供」(「村の子」) 十三枚、「ダイヤと電話」十三枚、「支那手品」十五枚、「鯉」十五枚、「激戦」十五枚、「雀とカニ」(「スィメとカニ」) 十四枚、「畑の芋」(「芋」) 十一枚、「鮠の幽霊」(「ハヤ」) 十枚、「城山探検」二十枚、「蜜蜂の女王」(「蜂の女王」) 十二枚、「スキ」十四枚、「異人屋敷」十五枚、「犬の日曜学校」(「日曜学校」) 十五枚、「引越しの日」(「引つ越」) 十三枚、「お馬」十五枚、「どろぼう」十五枚、「魔法」十五枚、「デンく虫」(「でんく虫」) 十五枚、「狐狩り」(「狐狩」) 十五枚、「ペルーの話」十二枚、「十四枚・十四枚・十四枚の四回にわたる掲載、「真珠」十二枚、「ビ

ワの実」(「ビハの実」) 十五枚、「岩」十五枚、「猛獣狩」十五枚、「白ねずみ」十五枚、「二匹の蛙」十四枚

これらより、「城山探検」の二十枚という例外もあるが、それ以外は十枚から十五枚の範囲に収まっており、譲治の『赤い鳥』童話の寄稿については、この枚数の範囲が念頭にあったものと思われる。

次に、本草稿内容を確認し、小説「けしの花」との関係に注目すると、すでに譲治が三重吉に原稿送付した段階で、題名、内容および文体もともに小説「けしの花」とは形を変えている。つまり、作品の内容からこれらのことを確認する際、小説「けしの花」の初出形(『経済往来』発表形)と本草稿「魔法」および「魔法」初出形(『赤い鳥』発表形)とを比較することによって、構成の違いを指摘すると、小説「けしの花」が「一」「二」「三」の三章構成であるのに対して、童話「魔法」は「二」章のみの内容が使われている。ここから、童話「魔法」には小説「けしの花」の「一」「二」「三」章を使わなかったことで、譲治自身が「一」「二」「三」章に出てきた登場人物や出来事をすでに削除したり、「二」章の終わりを童話「魔法」の結末らしくまとめたたりするなど、小説「けしの花」の「二」章を単独で童話「魔法」として成立させるために、必要な推敲を加えていたと考えられる。要するに、原稿枚数七十枚の小説「けしの花」が先に成立して、そこからちょうど原稿用紙十五枚に整えることができる。「二」章に譲治自身が手を加えることで童話「魔法」として成立させていると推定できるのである。

なお、以下の翻刻では、本草稿において、譲治執筆の最終稿から、

三重吉がどのように手入れをして最終形に至ったのかという草稿上の変化の確認を目的として示しているが、前述したように本草稿手入れ後、『赤い鳥』掲載形に至るまでの校正段階で、さらに変更の手が加わっていることも明らかである。その変更の多くが、表記上の統一などを主とする性質のものであるが、なかには例えば〈第10葉〉の最終行の「二人」が、『赤い鳥』誌上では「善太」に変えられるなど、内容を左右する変更も確認される。この校正段階においても譲治が関わっていないことは、前掲した譲治の文章より知られるところである。

## 二 翻刻

〔翻刻にあたって〕 凡 例

一、【 ↓ 】 内の記述は、矢印前の記載が坪田譲治の書いた初期形の最終稿であり、矢印後の記載は、鈴木三重吉による手入れ内容の入った最終形である。

二、重ね字は、草稿の表記通り「〳」を用いた。

三、不明な文字については〔○字不明〕とした。

四、編集のための文字や記号は除いた。

五、旧漢字は新漢字に改めた。旧仮名づかいはそのままとした。

六、助詞の「が」や「で」など、坪田譲治の書き癖として、濁点が抜ける場合があるが、この点のみ意味を汲んで統一した。

### 草稿「魔法」

〈第1葉〉

魔法（童話）

坪田譲治

「兄ちゃん、おやつ。」

【（改行あり）↓（改行トル）】と、【叫↓さけ】んで、三平が庭へ駆けこんで【行↓い】きま【した。↓すと、】

「馬鹿つ。【黙↓だま】ってる。今、おれ、魔法を使ってるところなんだぞ。」

兄の善太が手を上げて、三平をとめました。

【魔法】。↓？】

三平は何【とも↓のことだか】解らず、【唯だ↓たど】ビククリ【致↓（削）】しましたが、善太は大得意で、【ひげ↓ひげ】をひねるやうな真似をして【云↓言】ひました。

「へん、魔法だぞう。」

【魔法て何さ。】

「魔法を知らないのかい。童話によく出てくるぢあないか。魔法使っていふのがあるだろう。人間を羊にしたり、犬にしたり、それから自分で小鳥になったり、鷲になったり【（無）↓さ】。鷲になるのいゝなあ。飛行機のやうに空が飛べ

〈第2葉〉  
るんだ。」

「ふ——ん。それで兄ちゃん、今、驚になるところなの。」

「さうぢあないよ。まあ、いゝから【見てぬ↓兄ちゃんが見てる方を見てぬ】なさい。」

それで三平は黙つて、日の静に照つてゐる庭の方を眺めました。そこにはけしの花が咲いてゐました。眞紅な大きなけしの花。黄色な小さな【けし↓けし】の花。白い【けし↓けし】の花。何十と列んで咲いてゐました。【(改行なし) ↓ (改行入れる)】その花の上を一羽の蝶が飛んでゐました。小さな、白い、五銭玉のやうな蝶々です。ひら／＼、ひら／＼。紅い花のまわりを飛んでるかと思ふと、もう白い花の上の方へ。黄色の花の中へもぐり【込↓こ】んだかと思ふと、もう三メートルも四メートルも上の空へ舞ひ上り、ちら／＼、ちら／＼。

【此↓今】度は葉つばの中へもぐり【込↓こ】んで、【何處↓どこ】とも知れず見【へ↓え】なくなつてしまひます。しかし、またいつの間にか、【何處↓どこ】からかしら【へ↓削】舞ひ出て來るのであります。

### 〈第3葉〉

「兄ちゃん、もう魔法使つたの。」

また三平がきゝました。

「黙つてろ。」

そこでまた三平は【眼↓目】の前の蝶を眺めました。蝶は今けし坊主の上にとまつて【居↓を】ります。けしの花は美しくても、このけ

し坊主は氣味の悪いものであります。まるで、花の中に【坊さん↓河童の子】が立つて列んで【居↓ぬ】るやうに【見へ↓思へ】ます。その坊主の上で蝶々は羽根を開いたり閉ぢたりして【居り↓ぬ】ました。【(改行なし) ↓ (改行入れる)】そこで三平は顔を近よせて、その蝶の羽根を詳しく見ようと【覗↓のぞ】き【込↓こ】みました。その羽根には不思議なことに、眉毛の【ある眼↓ついた、目】のやうな模様が一つづゝ奇麗について【居り↓ぬ】ました。

「兄ちゃん、蝶には羽根に【眼↓目】がある【らしいよ↓のね】。」と、【そこで↓削】三平が【云↓言】ひました。

「馬鹿つ。蝶だつて、【眼↓目】は頭について【らあ↓るよ】。」  
「だつてさ。」

さう【云↓言】つて、三平がもう一度顔を近よせようとし【まし↓削】た【時↓とき】、蝶はひら／＼と舞ひ立つて

### 〈第4葉〉

、三平の鼻や【眼↓目】の上を、その小さな翼で【叩↓たゝ】くやうにして飛んで【行↓い】きました。三平が口を開けてゐたら、その口の中へ入つてしまつたかも知らない位であります。【(改行なし) ↓ (改行入れる)】三平は驚いて、顔をそむけ、手をあげて、蝶を【叩き↓たゝかうと】しましたが、蝶はやはりひら／＼ひら／＼【(無↓と)】見る間に空の上に【昇↓のぼ】り、それからどことも知れず見【へ↓え】なくなつてしまいました。その【時初↓とき、はじ】めて、  
「あゝあ、とう／＼飛んでつてしまつた。」

【(改行あり) ↓ (改行トル)】と、善太が大意をついて【云↓言】ひました。【が、↓ (削)】しかし、【こ↓そ】れ【が↓は】何【どいふのでありませう↓のことませう】。三平は不思議でならず、また聞いて見【るのであり↓ (削)】ました。

「今の魔法なの。」

「さうさあ。」

「ふーん。」

【(改行あり) ↓ (改行トル)】と【云↓言】ったものゝ、やはり三平には分りません。

「どうして魔法なの。」

「分らない奴だなあ。」

〈第5葉〉

さう【云↓言】つてるところへ、またさっきの蝶が舞ひもどつて來ました。

「し【つ↓ッ】。」

【(改行あり) ↓ (改行トル)】と兄ちゃん【云↓言】ひますので、三平はまた黙つて蝶の【ひらく↓とぶのを】を【眺め↓見てゐ】ました。すると蝶【が↓は】またけし坊主の上にとまりました。そこで三平はまた顔を近よせました。どこに魔法があるのか、よく見たいと思つたからであります。しかし蝶の方では見られては困るのか、羽根を【やけに↓ (削)】忙しく開いたり閉ぢたり【(無) ↓ したとおもうと】、また【そして↓ (削)】【(無) ↓ ひらくと】三平の顔とすれく

空【に↓へ】飛んでしま【い↓ひ】ました。すると善太が話し出しました。

「三平ちゃん、魔法教へてやらあ。」

「うん【つ↓ッ】。」

三平は大喜びで、兄ちゃんの側へよつて來ました。

「どうするの。」

「まあ、きゝなさい。僕ね、さつきこゝへやつて來るとね。【けし↓けし】の花がこんなに【沢山↓たくさん】咲いてるだらう。【(無) ↓ これを見てると】、何だか、かう魔法が使へさうな

〈第6葉〉

氣がして來たんだよ。それでね、まづ第一に蝶をこゝへ呼び寄せることにしたんだよ。ね、【眼↓目】をつぶつてさ、蝶よ、來いって、口の内で【云↓言】つたんだよ。それから、もういゝかなあと思つて、【眼↓目】をあけたら、ちゃんと蝶が來て花の上を飛んでんのさ。」

「ふーん。」

三平は感心してしま【い↓ひ】ました。

「さうかあ。それが魔法【なんだね↓か】。【眼↓目】をつぶつて、蝶よ來いって【云↓言】ふんだね。なあんだ。僕んだつて出來らあ。」

これを聞くと、善太が笑ひ出しました。

「駄目だい。三平ちゃんなんかに出來るかい。僕なんか、魔法の話はず【い↓あ】ぶん讀んでるんだもの。アラビヤン・ナイト、グリム童話集、アンデルセン、何十つて知つたらあ。知つてるから出來るんぢ

あないか。三平ちゃんなんか、何も知らないんだらう。」

「いゝや、知らなくなつていゝや。【眼↓目】をつぶつて、【云↓言】ひさへすりやいゝんだもの。ようし」

# 〈第7葉〉

、やろう【つと↓ッ】。——小さい蝶々、もう一度出て来うい。来ないといと、石ぶ【つ↓(削)】つけるぞう【——↓(削)】。」

「来るかい。そんなことで。蝶々、来ちや駄目だぞう。来たら、棒で【叩↓たゝ】き落すぞう。」

とう／＼魔法の喧嘩になつて二人でそんなことを呼び合ひました。それから二人は、蝶が来るか来ると待つてゐましたが、蝶は【ついぞ↓中々】姿を見せません。【それに、風がバツタリ止つて、↓たゝ】【けし↓けし】の花ばかりが静かな日光【【無↓の中】に美しく咲いてゐ【ました↓るきりです】】。

「さうらね。兄ちゃんが【云↓言】ふ通りだらう。魔法の蝶なんだから。来るなつて【云↓言】つたら、どんなことがあつても来やしない。だつて、あの蝶【【無】↓、】人間がなつてんだぞ。だから、人間の言葉が分るんだ【【無】↓ぞ】。」

善太は得意になりましたが、三平はきゝません。

「嘘だい。蝶は毛虫がなるんちあないか。」

「嘘なもんか。そんなこと【云↓言】ふと、三平ちゃんだつて、直ぐ蝶にしつちまうぞ。」

# 〈第8葉〉

これを聞くと、三平がかへつて喜んでしま【い↓ひ】ました。

「うん、蝶にして【【無】↓よ】。【直↓す】ぐして【【無】↓よ】。僕、蝶大好きなんだ。」

【此↓今】度は善太の方で困つてしま【い↓ひ】ました。そこで【云↓言】ひました。

「だつて、蝶になつたら、もう人間になれないんだぞ。」

「いゝや。空が飛べるからいゝや。」

【内↓家】になんぞ帰れないぞ。」

「いゝや。飛んで歸つてしま【う↓ふさ】。」

「歸つたつて駄目だ。蝶だもの。【誰だつて↓だれも】相手にしてくれりやしない。追ひ出せ、追ひ出せ【つて↓つて、】【叩↓たゝ】き出してしま【う↓ふさ】。」

「いゝや。いゝから蝶にして【【無】↓よ】。【直↓す】ぐして【【無】↓よ】。」

三平がさう【云↓言】つて。善太の手を引張つて【居↓ゐ】る【時であり↓ときであり】ました。垣根の外を一人の坊さんが通りかゝりました。坊さんは黒い着物に黄色い袈裟をかけてゐました。【こ↓そ】れを見ると、善太が小さい声で【云↓言】ひました。

「三平ちゃん、見な。あそこを坊さんが【行↓い】く」

# 〈第9葉〉

だらう。ね、あれを僕今、蝶にして見せるから。」

「うん、【直↓す】ぐして。【直↓す】ぐして見せて【【無】↓よ】。」

「待つてろ。待つてろ。」

「ならないぢあないか、兄ちゃん。早くしないと、【彼方↓あつち】へ【行↓い】 っち【(二字不明)↓やふ】ぢあないか。」

「いゝんだよ。いゝんだよ。」

さう【云↓言】 ってる間に、坊さんは【彼方へ行↓向うへい】 ってしま【い↓ひ】 ました。

「どう【く↓く】 行つち【あつ↓やツ】 た。駄目だよ、兄ちゃんなんか。早くしないから【行↓い】 っち【あつ↓やつ】 ったち【あ↓や】 ないか。僕、人間が蝶になるところが見たかったんだ。」

「だつて、そりや駄目だ。あの人、蝶に【な↓す】 るって【云↓言】 ったら怒つちま【う↓ふ】 だらう。だから、分らないやうにして、【しまうん↓やるん】 だ。どこにゐたつて出来るんだから、【眼↓目】 の前にゐない方がかへつていゝんだよ。」

丁度さう【云↓言】 ってるところでした。一羽の黒あ、げは、がひらくと風に乗つて飛んで來まし

#### 〈第10葉〉

た。

「さうらあ、來た、來た。」

善太が【こ↓そ】 れを見て、大きな声を出しました。

「ね、これ、今の坊さんなんだよ。もう蝶になって飛んで來ち【あつ↓やつ】 た。早いもんだ。」

これで三平も少し【く↓削】 不思議になつて來ました。ほんとに、このあげはの蝶と、今の坊さん、どこか似たところがあるやうです。

そこで聞いて見【る】 ので↓ま【し】 た。

「ほんとう。兄ちゃん、ほんとに魔法使つたの。」

「さうさあ、大魔法を使つたんだ。」

「ふ——ん。いつ使つたの。」

「今さ。」

「今つて、何もしなかつたち【あ↓や】 ない【か↓の】 。」

「それがしたのさ。三平ちゃんなんかに分ないやうにやつたんだ。だから、魔法なんだ。」

「ふ——ん、さうかねえ。」

【いよく↓削】 三平は【無↓すつかり】 感心してしま【い↓ひ】 ました。それから二人は通る人ごとに魔法を使つて、ト

#### 〈第11葉〉

ンボにしたり、バツタにしたり、蟬なんかにまでしてしま【い↓ひ】 ました。自動車を運轉手ごと魔法をかけたら、それはカブト虫になつて、樫の木の枝の上にとま【つてゐ↓り】 ました。運轉手がゐないので、さがしてゐたら、その角の先に油虫のやうな小さな虫が乗つかつてゐたので、それだといふことにきめました。【(改行なし) ↓ (改行入れる)】 背の途方もなく高いチンドン屋が通つたので、それに魔法をかけたら、それはカマキリになつて、いつの間にか、けしの花の葉っぱの中に【とま↓ぶら下】 つてゐました。三河屋の小僧はイナ【に】 し、肉屋の小僧はミゝズにしてやりました。ところがミゝズにした肉屋の小僧は土の中にあるもので、【それをさがし當てるに苦労しまし↓と



うくさがし出せませんでし」た。

【さうして↓(削)】二人は、【こ↓そ】のカブト虫やカマキリやバツタやトンボを【捕↓つかま】へて来て、縁側に行列をつくらせて、おやつを食べく遊びました。

ところで、その翌日のことあります。善太が学校へ【行↓い】く前に【云↓言】ひました。

〈第12葉〉

「三平ちゃん、僕今日学校から魔法を使つて歸つて来るぞ。」

「ふ——ん。ぢ【あ↓やア】、トンボになつて来るの。」

「トンボなんかになるかい。」

「ち【(無)↓やア】、蝶がいゝよ。奇麗なく蝶々。」

「駄目だい。蝶なんか【嫌い↓きらひ】だ【(無)↓よ】。」

「ちあ、何にするの。」

「さうだなあ。僕、もしかしたら、つばめにするかも分ないよ。早いからねえ。空を一飛びだ。つ——【つ↓ッ】。」

善太はもう両手を【拈↓ひろ】げて、【つばめ↓つばめ】の飛ぶ真似を【やり始↓しはじ】めました。【(無)↓そして】座敷を一廻りすると、また【云↓言】ひました。

「もしかしたら、鳩だ。白鳩、傳書鳩。パタ〜ッパタ〜ッ、飛行機より早いんだ。」

【此↓今】度は鳩の飛ぶ真似をして座敷を廻りました。一【(無)↓ど】廻【りする↓る】とまた【云↓言】ひました。

「でも、【内に↓家へ】入つて来る【時↓とき】には三平ちゃんに分ないやうに、門のどこから蟻になつて【這つ↓はつ】て来るかも知れないよ。そして、そうつと

〈第13葉〉

三平ちゃんの背中へ【這↓は】ひ【こんで↓上つて】、手の届かないところをチクツとさしてやるんだ。わあ、面白いなあ。」

これを聞くと、三平も黙つて【居り↓ぬ】ません。

「蟻なんかなら【訳↓何でも】ないや。【直↓す】ぐ着物をぬいで、指でひねりつぶしてしま【う↓ふ】から。」

「だったら蛇になつて来る。三平ちゃんが庭へ出てるところへ【這↓、は】つて【行↓い】つて、ガブツと、手でも足でもかみついてしま【う↓ふぞ】。さうら、蛇だ【あ↓、蛇だあ】。」

【此↓今】度は善太は蛇のやうな真似をして、【逃げる↓(削)】三平を追ひ廻しました。

その日の午後のことあります。三平は庭へ来て兄ちゃんを待つておきました。魔法を使つて歸つて来るといふのだから、何になつて歸つて来ると、それが楽しみで、【一生懸命待つてゐるのでした。↓(削)】空の方を見たり、道の方を見たり、樅や檜の茂みの中をさがし廻つたり、けしの花の中を【覗↓のぞ】き【込↓こ】んだり【するの↓してゐま】した。【そして↓(削)】蝶が飛び立つと、もしかしたら、それかも分らないと追【ひ↓つ】かけて見たり、道から犬が駆け【込↓こ】んで来【ます↓る】と、

〈第14葉〉

これも怪しいと、捕へて見たりました。

「こら、兄ちゃんだらう。僕には分つてゐるぞう。」

【そして↓(削)】こんなことを【云↓言】つて見ました。しかし、【大になんぞ(四字不明)ありませんから↓(削)】犬は【唯だ↓たど】不思議さうに目をパチクリ【やり↓させ】、何か食べものでもくれるかと、尾っぽをしきりに振り立てました。【それで↓(削)】放してやると、【犬は↓大急ぎで】どっかへ駆けてつてしまいました。

【色々虫をさがし廻った末↓そのうちに】三平は庭の隅でデン／＼虫を見つけました。それを見ると、また、もしかしたらと考へて、話しかけて見ました。

「こら、兄ちゃんか。もう逃しっこないぞ。」

そしてそれを捕へると、縁側へ持つて来て

「デン／＼虫々、↓(削)】槍出せ、角出せ。」

【(改行あり) ↓(改行トル)】と【(無) ↓、いぢつて】遊び【始め↓(削)】ました。【つい↓いつの間にか】魔法【など↓のことも】忘れて、大分久しく遊ん【だ時で↓でぬま】した。【(無) ↓と、】玄関で兄ちゃんの声がしました。駆けてつて見ると、兄ちゃんが靴をぬいで【居り↓ぬ】ます。

〈第15葉〉

「兄ちゃん、魔法は」

「あつ、魔法か。今、門まで風になって吹いて來るんだけど、門から

もうやめて入つて來たんだよ。」

しかし兄ちゃんが何だか【嘘らしい↓すぐつたさうな】顔をして、ニコ／＼笑つてぬ【ます↓る】ので、

「嘘だいい。」

【(改行あり) ↓(改行トル)】と、三平【が云↓は言】つてしまいました。すると、

「ほんとうは兄ちゃん風なんだよ。それが魔法を使つて人間になつてんだよ。」

そんなことを【云(四字不明) ↓言つて、兄】ちゃんがハツク笑【ひました↓ふ】ので、とう／＼嘘【(無) ↓だ】といふことが分【つて、】りました。

【(無) ↓やアいい、】嘘だいく。」

【(改行あり) ↓(改行トル)】と、三平がと【りかゝつて行き↓びかゝつていき】ました。それで二人は座敷で大相撲を【始↓はじ】めました。(をほり)

※ 今回の解題と翻刻にあたっては、坪田譲治の三男坪田理基男氏、吉備路文学館のご理解とご協力を賜つたことを感謝申し上げます。

※ 翻刻作業において、本学博士後期課程在籍中の白根直子、本学平成一七年博士前期課程修了生山脇佳奈の協力を得たことを付記する。

(やまね ともこ／ 本学教授)